

2007 大阪世界陸上がテレビ視聴者に与えた影響

The influence of IAAF World Championships in Athletics 2007 on the televiewer

1K04A0038-9

詠村 太郎

指導教員

主査 磯繁雄先生

副査 作野誠一先生

【緒言】

現在、日本で陸上競技はマラソンや一部の長距離種目を除くと、マイナーな競技になりつつある。

国内では最も重要な大会である日本選手権においても競技場が満員になることはない。また、競技力が高いにも関わらず、練習環境に苦しんでいる選手が多く存在している状況もある。

このような厳しい状況下にある陸上競技をこれから発展させるためには、実際に競技場で観戦する人数に比べて圧倒的に放映を見る人数が多いため、視聴者に多大な影響を与えるテレビ放送を利用出来ないだろうかと考えた。テレビ中継は多くのスポーツを世界的に広め、市民の各種スポーツへの参加を促したことは言うまでもない。そのテレビ放送が視聴者に与える影響を考察することにより、今後競技普及のため、テレビをどう利用すれば有効かが明らかになるのではないかと考え、本調査を行った。

【研究方法】

2007年8月から9月にかけて開催された大阪世界陸上を通じて、視聴者の意識はどのように変化したのか、また、テレビ放送について何を感じているかを明らかにするためにアンケート調査を実施した。

● 地上波放送での放送の問題点

i) 外国人選手の取扱い、ii) タレントによる番組の盛り上げ、iii) 人気種目に偏りがちな放送

● 陸上競技大会全体のイメージの変化

早稲田大学スポーツ科学部のスポーツマーケティング論、村岡功教授のスポーツ生理学の受講生に回答してもらい、有効回答の得られた155名(男97名、女58名)を調査対象とした。

【結果と考察】

外国人選手の取り扱いについては、7割近くが「十分報道していた」と回答していた。タレントによる番組の盛り上げについては視聴の有無間で有意差が認められ、視聴していない対象者ほどタレントキャスターについて好ましく思っていないということが明らかとなった。また、人気種目への偏りでは、好ましくないという回答(40%)が好ましいという回答(22%)の約2倍あり、番組の偏りは好ましく思われていないことがわかった。

イメージの変化では、全体ではどの項目も20%前後の者が競技に対するイメージを変化させていた。その中でも特に「単純ー複雑」「取っつきやすいー取っつきにくい」間で、顕著に良いイメージ変化が現れていた。

このイメージの変化は、テレビ放送に触れることによって競技の面白さを感じ取れるということであり、今後も陸上競技に触れる意欲を駆り立てるものである。しかし、タレントを用いた番組の演出は視聴者に不快感を与える可能性があり、人気種目に偏った放送は報道の多様性、公共性を減少させるともいえる。

最も重要なことは、このような放送提供が、今後の競技普及を妨げる恐れがあるということである。視聴者をテレビから離れさせ、せつかくの世界大会であるのに見ることができない種目が出てくる可能性を生む。

【まとめ】

今回の調査で、テレビ視聴により競技のイメージが良い方向に変化することが明らかとなった。

視聴率を上げるための演出はある程度仕方ないことであるが、報道の多様性、公共性を維持した番組作りが今後必要である。